



自分の命日をピタリと当てた？ 易聖・高島嘉右衛門最期の易断

はじめに

一寸先は闇と言いますが、一分、一秒後のことも分からない私たちは、人生がいつ終わるかなど知る由もありません。しかし、そんな自分の命日をピタリと当てた人物がいたといえます。明治時代の横浜で活躍した高島嘉右衛門です。

高島は土木建築請負業を中心に、多くの事業を幅広く手掛けた実業家でした。しかし、彼の名は、むしろ「高島易断」の祖として知られ、伝記も多く書かれています。例えば推理作家の高木彬光は、高島の生涯を『大予言者の秘密』という小説にしており、その「プロローグ」に次のような話が、実話として紹介されました。

大正三年(1914)十月十七日没

それは高島の死の3カ月前、桜井大路という人相学では大名人といわ

請負いました。そのほか、横浜・函館間定期航路の開設や日本初のガス会社の創立。横浜共同電燈会社、北海道炭礦鉄道会社、東京市街電気鉄道会社の社長就任など。
ほかに、洋学教育機関である高島学校を創設する一方で、横浜に遊郭を設置するなど、聖俗問わず好奇心と欲望の赴くままに事業を展開しました。

新橋・横浜間鉄道用地埋立工事

こうした彼の事業のうち、建設産業史の観点から注目すべきは、やはり明治5年(1872)に開業した日本初の鉄道、新橋・横浜間鉄道の用地埋立工事です。しかも、彼は単なる請負人ではなく、当初は自分で日本初の鉄道事業を興そうと、政府に請願していました。しかし、鉄道事業は国営で行うという政府の方針から却下され、結局のところ工事の難所となる横浜の海面埋立を請負うことに落ち着いたのです。

現在の横浜駅付近の中心街は、当時は入江になっていました。そして当初の横浜駅の開設予定地は、入江の先の現在の桜木町駅の位置にあったので、この入江が線路工事を阻んでいたのです。そこで、高島は入江に長さ約1.4km、幅約76mの細長い埋立地を造って線路を敷くことを提案し、自ら工事を請負ったのです。

れた人物が、病に伏した高島を見舞った時のことでした。桜井は「先生は少なくとも米寿までは長生きなさいますと、私は鑑定しますが」と、高島を励ました。

すると高島は「あなたほどの人相骨相の達人が心にもないことを言われるとは、私もいささか驚きました。私自身の余命についてはとくに悟り切っておりません。正直なことをおっしゃっていただきたいものですな」と、桜井を見つめました。

「直接、相手に向かってその死期を告げるな、とは占い師のおきてでございませぬ。そのようなことは先生は百もご承知のはず、それをおしきつてのおたずねとならば、私も正直に申し上げましょう。あと3カ月、10月中旬までのご寿命とご鑑定いたします」

高島はふっと微笑み、「失礼ですが、あなたは私の死後、占いの道では日本一の名人とうたわれましょう。」



高島嘉右衛門が造成した鉄道用地埋立地。現在の横浜市区高島付近
出典:「神奈川の写真誌 明治前期」(有隣堂)

日本初の鉄道工事請負人

この工事において、高島が政府と交わした「鉄道御造営二付横浜野毛海岸石崎並ヨリ神奈川青木町海岸迄土堤築地之約条目」および「埋立地仕様書」は、日本初の鉄道工事請負契約書・仕様書といわれています。近代以前の土木建築請負業は、鉄道工事という建設市場が生まれたおかげで、近代的な建設企業へと発展しました。その最初の鉄道工事請負人となったのが、高島嘉右衛門だったのです。

易聖・高島嘉右衛門

さて、高島の数々の事業を、陰で支えていたのが、易断だったといえます。しかも、そのみならず征韓論や西南戦争、日清戦争における三

恐縮ですがその違い棚の上の手文庫をとってくださいますか?」
その手文庫から高島は自分の位牌を取り出しました。それには「大正三年十月十七日没 享年八十三歳」と書かれていたのです。



汎日本易学協会が建てた高島先生顕彰碑(神奈川県横浜市神奈川区高島台)

冒険的な商人

このような話が語られるほど、易断家としての彼は有名だったので

国干渉、日露戦争の行末など、国家の大事を占い、それらは新聞にも掲載されるほどでした。

そもそも易断とは、五十本の筮竹と算木から得られた「卦」の解釈が重要となります。同じ卦を得ても占う人間が違えば、別な解釈となることは自明のことであり、実業家として人心や時勢を読むに長けた高島ならば、常人よりも占いの精度は高くなっても不思議ではありません。決して荒唐無稽な超常能力というわけではなく、ビジネス・チャンスにつなげる社交ツールとして易断を利用していたと考えている研究者もいます。

桜井大路の宣伝記事

それでは高島が自分の命日を当てたという話に戻りましょう。その出典である大正5年(1916)7月13日の中央新聞の記事を見ると、見出しに「恋を隠した顔 美人が観て貰ふ骨相家」とあります。どうやら、高島の病状を見舞ったという桜井大路が、骨相鑑定所を開店したおりの宣伝記事のようです。

記事の中で、桜井は高島に寿命を聞かれたので、「『多分十月の中旬だ』と答へた。すると流石は易学の泰斗だけに翁自身も既に自分の寿命を易断してあって、十月十七日と位牌面に記したものを秘蔵の手文庫から出して見せた」とあります。

す。しかし、そもそも彼は実業家であり、その業績は決して無視できないものでした。それなのに、あまり評価を受けないのは、同時代の浅野総一郎や大倉喜八郎のように事業を次代へと伝えたわけでもなく、原三溪のように実業の傍ら日本庭園「三溪園」を残すなど、文化事業にその名を冠したわけでもなかったからです。

高島は、こうした後世を見据えた人物たちとは毛色が違い、近代の黎明期である明治時代ならではの冒険的な商人であり、次々と新規事業に手を付けては、放棄することを繰り返したのです。

高島嘉右衛門の功績

では、彼の手掛けた数々の事業を見ていきたいと思います。まず土木建築請負人としては、開化期横浜ならではのイギリス公使館を始めとする洋風建築、また各地の灯台建設を

高木彬光の小説と比べると、ぶつきらぼうなもの言いですが、続けて「果たして高嶋翁は三月後の十月十七日に永眠したので、門弟連は共に翁と櫻井氏の活力自在に感嘆し今でも此の話は有益な一話として残されている」と、関係者間では知られた話だったようです。

おわりに

しかし、高島の死亡当時の新聞各紙を見ると、死亡年月日はいずれも「大正3年10月16日」となっています。高島の訃報を伝える記事は、翌17日の新聞に掲載されていることから、彼が16日に亡くなったことは間違いないです。

桜井の宣伝記事は高島の死後に発表されたので、当然命日は分かっていたはずですが、それにもかかわらず17日としたのは、おそらく桜井が新聞記者が間違えてしまったのでしよう。そして、これは致命的でした。結局、高木彬光の著書以外は、この話はほとんど取り上げられなかったのです。正確に16日と書いていれば、本当に命日を当てたかどうかは別としても、この新聞が根拠となり、易聖高島を喧伝するにふさわしい伝説として語られ続けたことではないでしょう。たかが一日、されど一日。ささいな間違いが残念な結果をもたらしたというお話でした。

(文:江口知秀)

社年の高島嘉右衛門
出典:「吞象 高嶋嘉右衛門翁傳」